

資産管理信託銀行の役割 ーグローバル化・高度化する 投資業務の一翼を担う

日本トラスティ・サービス信託銀行社長
奥野博章



「日本トラスティ・サービス信託銀行 (JTSB)」は、住友信託銀行 (現三井住友信託銀行) と大和銀行 (現りそな銀行) の信託資産等を集約し、規模のメリットによる効率化と専門能力向上を図る目的で、日本初の資産管理専門信託銀行として2000年7月に営業を開始しました。

ほぼ同時期には、三菱信託銀行・東洋信託銀行 (現三菱UFJ信託銀行) 等を母体とする「日本マスタートラスト信託銀行 (MTBJ)」、みずほ信託銀行等を母体とする「資産管理サービス信託銀行 (TCSB)」が同様の目的を持って営業を開始しています。その後、中央三井信託銀行 (現三井住友信託銀行) が2002年にJTSB陣営に加わり、本邦における資産管理専門信託銀行は今日の3社集約の体制に至っています。

それまでは、6信託銀行と大和銀行がそれぞれ個別に資産管理業務を行ってきましたが、装置産業として巨額のIT投資を必要とするために、合弁を目指したのは当然の帰結と考えられます。その頃は、企業年金等において会計制度が受渡主義から約定主義に変わる一方、投資対象もプレーンな国内証券よりもかなり複雑なプロセスをもつ外国資産が増加するなど、多額のIT投資を要するイベントが続いていました。

3社集約後も、今日に至るまで、会計・税務・決済制度の変更は絶えることなく、その都度、かなりの規模でIT投資を続けてきています。また、高度な知識と熟練を要する外国資産における多様なコーポレート・